

国際通用性のある教育課程を考える —チューニング・プロジェクトの取り組み—

松塚 ゆかり

(一橋大学・森有礼高等教育国際流動化センター)

国立大学教養教育実施組織会議

2015年5月28日(木)

概要

1. 大学教育の国際化： 計画と実際
2. チューニングとは： 経緯と枠組み
3. チューニングにより期待される効果
4. 日本でのチューニング実践
5. まとめにかえて



教育の国際化：
グローバル化の要求と実際



大学教育の国際化： 加速する高等教育グローバル化促進計画

2013年6月14日閣議決定：「日本再興戦略」、「第二期教育振興基本計画」

➤ 2020年までに日本人の海外留学者数を**倍増**する。

(大学等：6万人から12万人、高校：3万人から6万人)

➤ そのために、「**若者の海外留学促進のための関係省庁等連絡会議**」を設置し、「各府省庁の強みを活かした取組を有機的につなぎ、具体的な課題に対して連携する。関係府省庁一丸となり**海外留学を促進**するとともに、**大学等や産業界においてもグローバル人材育成に対する意識を高める**」

内閣官房、内閣府、外務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、官公庁 (2014年4月)

【文部科学省】 「未来へ飛躍するグローバル人材の育成 —グローバル人材育成のための大学の国際化と学生の双方向交流—」

1. 大学教育のグローバル展開力の強化

(1)大学の体制の国際化、(2)教育プログラムの国際化

予算額：2013年；96億 → 2014年；127億 → 2015年；110億円

2. 大学等の留学生交流の推進(充実)

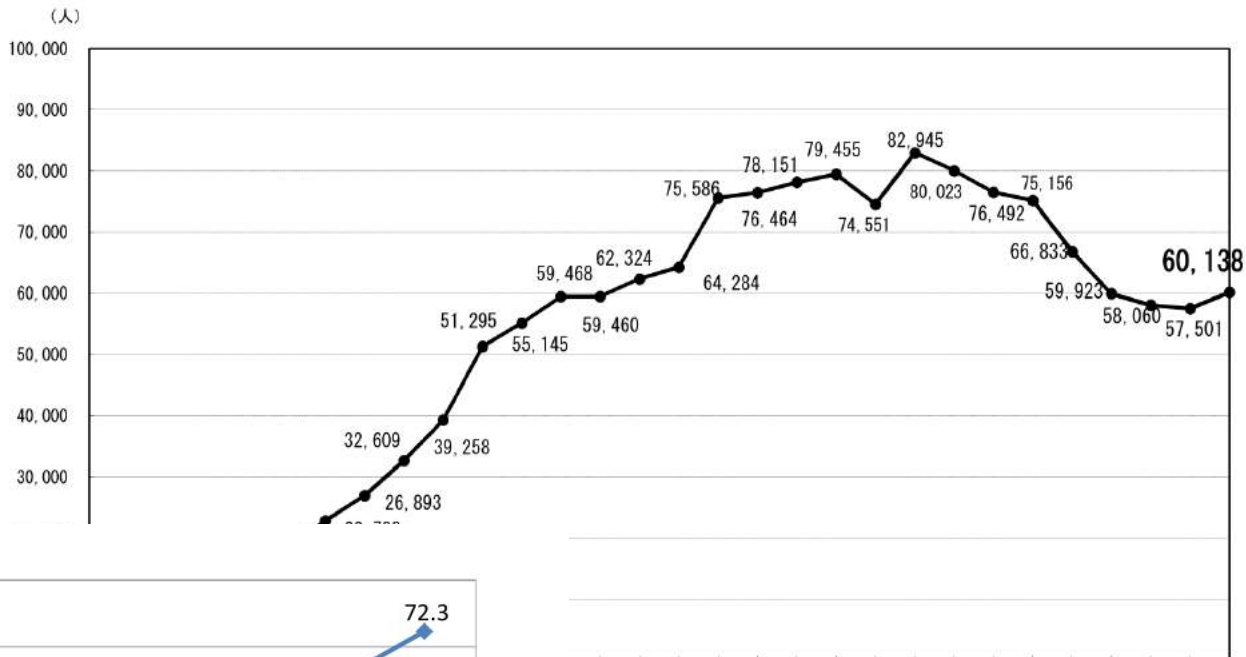
(1)大学等の留学支援制度の創設等、(2)優秀な外国人留学生の戦略的受入

予算額：2013年；335億 → 2014年；355億 → 2015年；353億円 4

大学教育の国際化： 留学をめぐる現状

日本人の海外留学状況

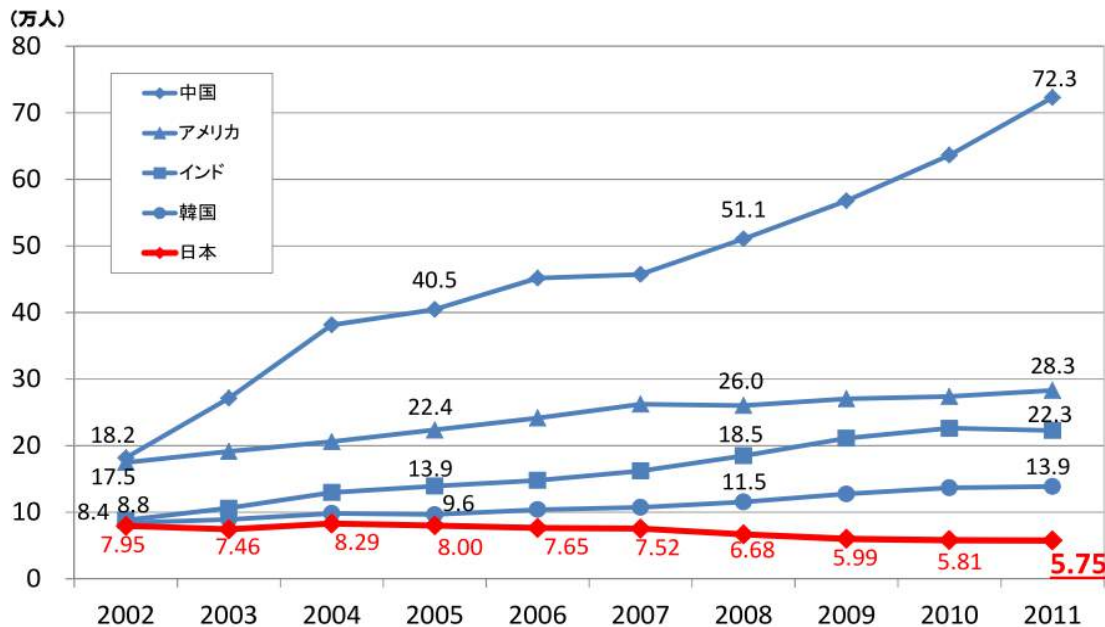
2004年の約83,000人をピークにその後2011年まで7年間約30%の減少。2012年はやや上昇し60,138人に。減少の対象となっているのは米国、英国、オーストラリア。この他の国については全体的にわずかに増加。



F 96年 97年 98年 99年 00年 01年 02年 03年 04年 05年 06年 07年 08年 09年 10年 11年 12年

J, 中国教育部, 台湾教育部

(2015年2月 文部科学省集計)

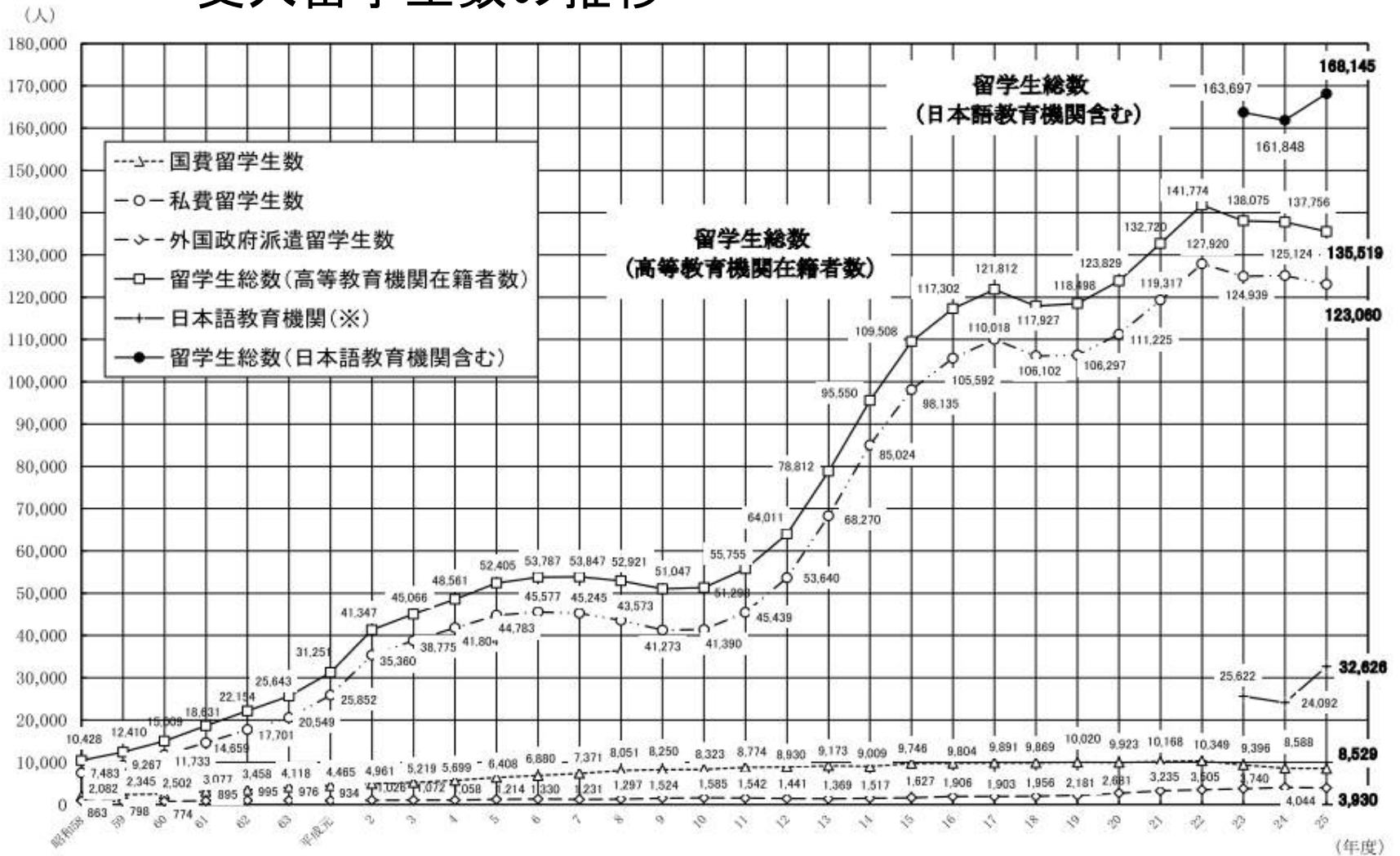


(出典) 米国はIIE「OPEN DOORS」, その他の国はOECD「Education at a Glance」, UNESCO「Institute for Statistics」

外国人の海外留学

諸外国から海外へ留学する学生等は一貫して上昇。特に中国の増加が著しく、2002年以降10年間で留学生数は約3倍に上昇。

大学教育の国際化： 受入留学生数の推移



※「出入国管理及び難民認定法」の改正(平成21年7月15日公布)により、平成22年7月1日付けで在留資格「留学」「就学」が一本化されたことから、平成23年5月以降は日本語教育機関に在籍する留学生も含めた留学生総数も計上。
なお、日本語教育機関に在籍する外国人留学生数(平成25年5月1日現在)は、32,626人。

日本人学生の海外留学が伸びない理由

- 日本の社会的、経済的な安定性を基礎とした生活のしやすさや豊かさを維持し、大きな失敗をしたくないという「リスクヘッジ」の傾向
- どのような留学をすると将来につながるのかが不明確
- 留学は就職につながらないのでは
- 就職時期を逸する
- 留学費用のこともあり、両親や家族の理解が得られない
- 留学先の情報が少なく、単位の認定状況が把握できない

国立大学協会国際交流委員会「留学制度の改善に関するWG」(2007)

学生の声

- 海外経験はしたいが、留学の必要性和メリットが良くわからない
 - 海外での学習が、どのように将来の就職やキャリアに役に立つのかがわからない
 - 留学をすると就職が遅れるし、将来の展望が見えにくくなる
 - 留学に費やす金銭的負担や時間に見合う効果が得られるのか
 - どのような科目を取れば単位互換ができるのか「事前に」わからない
 - 優秀な学生に見られる、日本を出ない傾向
 - 「機会コスト」を含む、費用負担への懸念
- 高等教育のユニバーサル化に伴う、これまでとは異なる留学生層と、費用対効果に関する意識変化



チューニングとは



チューニングとは

1. チューニングとは

楽器を「チューニング(調律)」するように、学習する内容、それにより得られる能力(コンピテンス)、学習成果、評価方法等を国内外の大学間で確認・共有することにより、国際的共通理解に基づいたコース設計と単位・学位認定の基盤を形成し、大学教育の国際的互換性を高める手続き

2. チューニングの目的

カリキュラムの統一化、規格化、標準化を目的とするのではなく、学生を主体として「学習」重視の観点から、専門分野別に教員主導により、以下の達成を目指す。

- 学習の内容を可視化し、課程に関するアカウンタビリティ「説明責任」を強化する
- 学習内容の比較可能性を高めて、学生の流動化と、学習機会の多様化を促進する
- 各大学における教育の独自性や特色を明確にし、そのさらなる強化をはかる

3. チューニングの特徴

- 学生中心 > 教員が「何を教えるか」ではなく、学生が「何を学ぶか」に重点を置く
- 大学主導、教員主導 > 大学と教員の自律性を尊重する
- 多様な文化や慣習、地域の独自性の重視 > 各国・地域個別のニーズに併せて柔軟な適用を奨励
- 地域的制約がない > 学生の移動とともに、その実践と成果が自由に共有される
- エンプロイアビリティを重視 > 雇用主や卒業生とチューニング成果の社会・経済的妥当性を確認・協議する各国の教育、訓練、雇用ニーズへの応答性を高めることを重視

チューニングとは： 創設と発展の経緯

- 欧州ボローニャプロセス(1999～)とリスボン戦略(2000)

目的: 欧州高等教育圏の構築と人的資源開発・強化

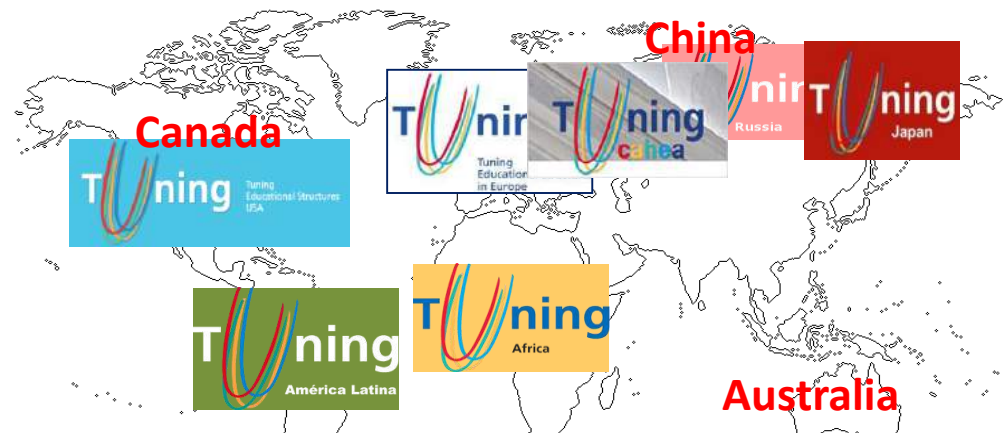
基本方針: 欧州域内の大学が教育制度や質評価について共通の枠組みを設定し、相互交流を促進して欧州全体の教育・研究力を強化する。そのために、加盟国で学位の構造並びに修学課程の年数や内容について情報を共有し、互いの教育・研究内容を比較できるようにして、教育の質を確認しつつ域内の流動性を高める。

- チューニング 「ボローニャプロセスへの大学の貢献」

2000年に欧州委員会の指導のもとに、フローニンゲン大学とデュウスト大学が幹事校となり、大学主体の事業として2000年にTuning Educational Structures in Europe が創始。EU域内でバラバラであった、単位制度、学位認証、資格認定を共有し、域内全体で大学教育の質保証をはかりつつ、学生の流動性を高めようとした。

- チューニングの急速な世界的展開

2008年	Tuning USA
2010年	Tuning Russia
2011年	Tuning Australia, Tuning Africa, Tuning América Latina
2012年	Tuning Canada, Tuning AHELO
2013年	Tuning CAHEA 中国が参加を決定
2013年	Tuning Japan

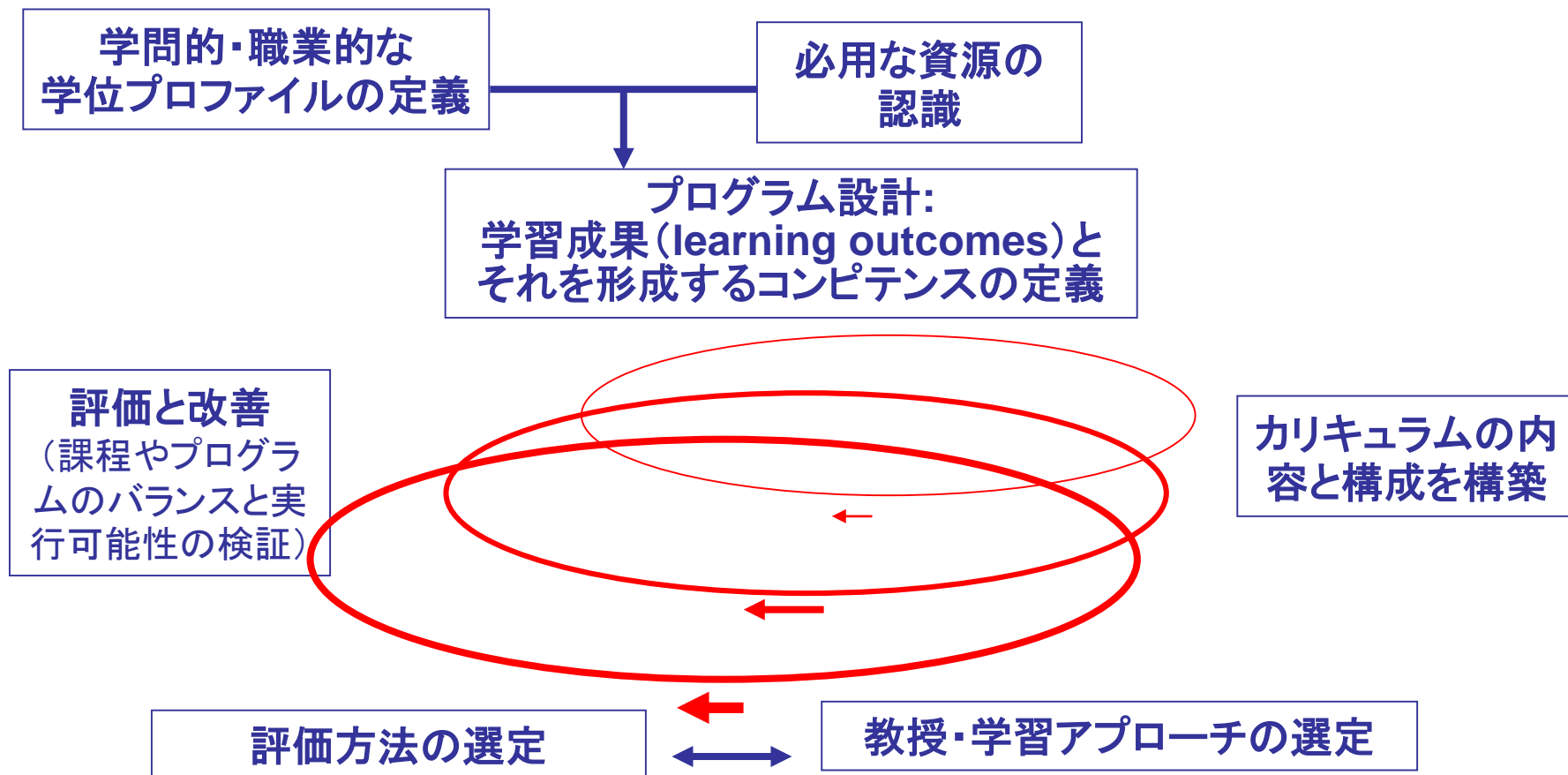




チューニングとは： チューニングの行程

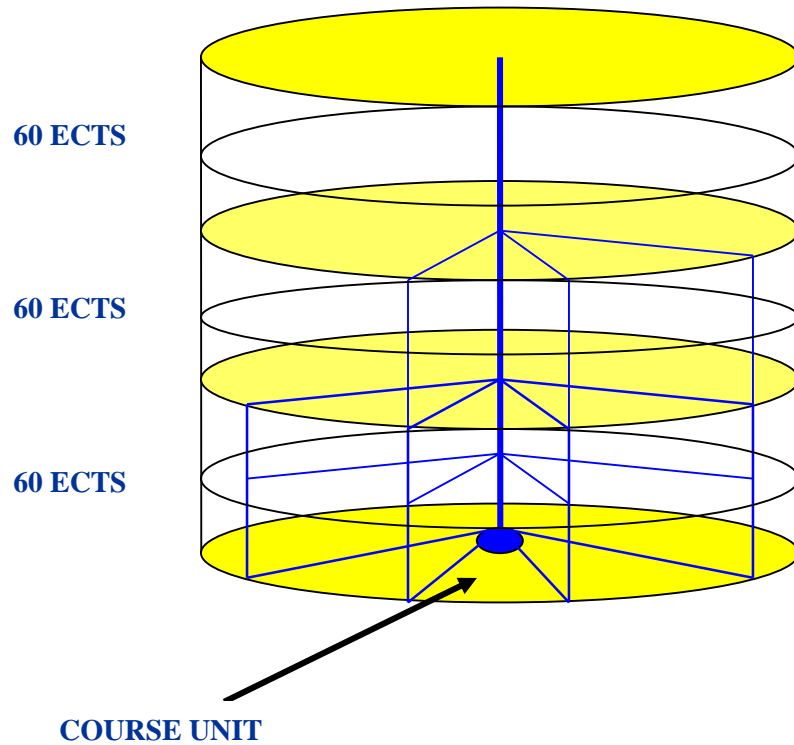


チューニングによるカリキュラム開発のサイクル



学位プロフィールと構成単位 (欧州の場合)

FIRST CYCLE PROGRAMME



- 企業や卒業生から社会や産業のニーズを確認する
- 上記を参考に分野別に学位プロフィールを定義する*
- 学位課程の各サイクルでの学習内容と養成されるコンピテンスを明確にする
 - * 汎用的コンピテンス
 - * 専門的コンピテンス
- 分野別に参照基準を作成する
- 多様性と特色を尊重し、学位課程のプロファイルとそれを構成するコンピテンス定義の見直しと改善をはかる

⇒情報共有

⇒流動性の促進

⇒質の向上



チューニングにより期待される効果



チューニングにより期待される効果

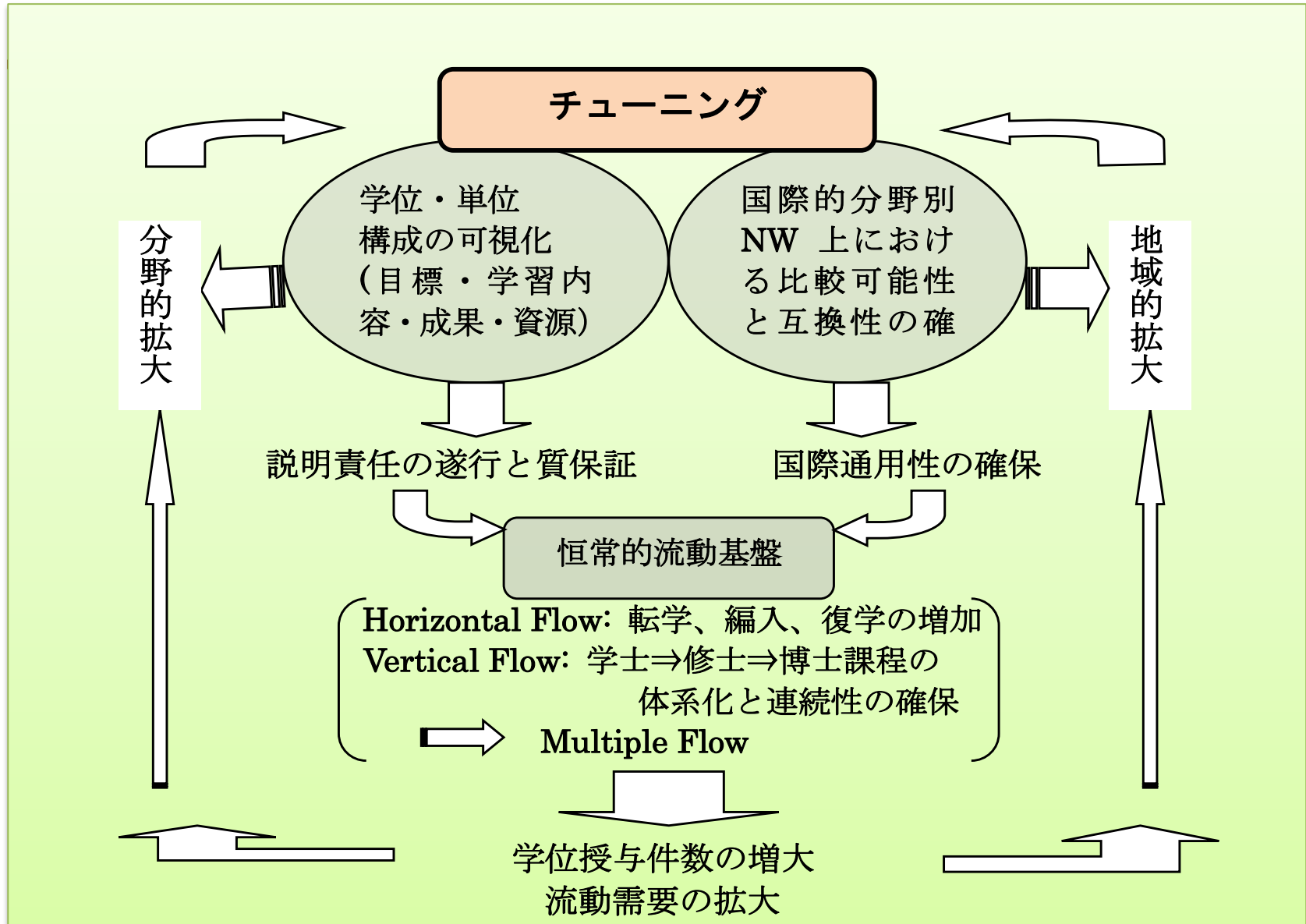
国内で期待できる効果

- ・ 学習内容と成果の可視化による説明責任の遂行
- ・ 科目、プログラム、課程の体系化と連続性の確保
 - 三つのポリシー等教学方針の策定と検証を容易にする
 - 転学、編入、復学の増加
 - 社会人の「学び直し」の機会を拡充
- ・ 単位の実質化に基づく、高質な学位授与件数の増加
- ・ 「結果としての」質保証

国際面で期待できる効果

- ・ 単位・学位の比較可能性と互換性の確保による、相互認定基盤の確立
- ・ 加算式単位制度の国際的運用による、円滑なモビリティの促進
- ・ 連携学位の増加と充実による、留学・研究交流の増大
- ・ 国際標準に即した教育の質保証へのインセンティブ
- ・ 日本の大学の分野別競争力強化

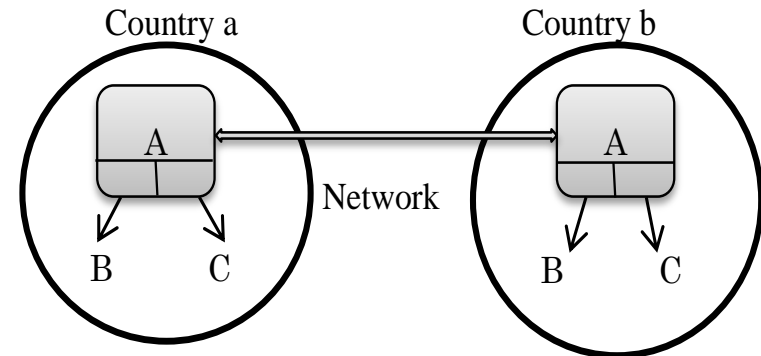
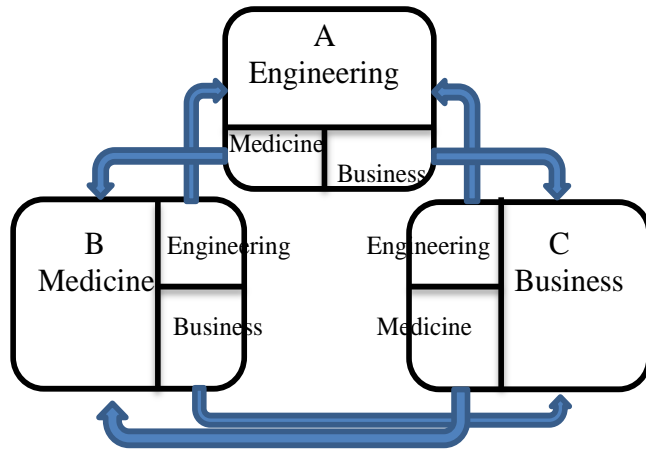
チューニングにより期待される効果



チューニングにより期待される効果：

分野別競争力の強化

例



- 国内の複数大学の連携による分野別チューニング
 - それぞれの分野で海外有数の国際パートナーを有する大学を中心に国際分野別チューニング
 - 国際チューニング成果を、国内の再チューニングにより調整する。
- 例1： 分野間チューニング (Horizontal tuning based on comparative advantage)
 ⇒ 「多角化」「高度化」
 ⇒ 補完性を活用して、領域における高度な英知を組み合わせる
- 例2： 専門特化型チューニング (Vertical tuning for competitive advantage)
 ⇒ 「高度化」「国際化」
 ⇒ 専門性を極めて、知識基盤社会における高質なモビリティを実現する



チューニングにより期待される効果:

「標準化」「規格化」との違い

科目、プログラム、課程間の、 「互換性」「比較可能性」「等価性」「累積性」再考

互換性 ⇒ 互いにとりかえがきくこと。機能・性能などが酷似しており、相互に置き換えが可能なこと

• 比較可能性 ⇒ くらべあわせられること

• 等価性 ⇒ 価値または価格がひとしいこと(等価)

➢「互換性」は「単位」を表現するものであり、学習内容に対するものではない

➢学習内容に互換性が高い場合は単位互換の対象となっても、他の全てが一定の場合はモビリティの促進要因にはなり難い。*

➢学習内容の比較可能性を高めて等価性が確認されたときに互換性を確保し得るが、この際学習内容が「酷似」している必要はない。

➢比較が成された時に 深化性、付加価値性、独自性、連続性等が確認された時に累積の根拠が見出される。



日本でのチューニング実践

日本でのチューニング実践： 一橋大学の事例から



HOME	機能と効果	事業概要	行事・トピック	事業推進スタッフ
------	-------	------	---------	----------



留学や研究交流の機会が増加する中、その学術的意義を確かなものとするためには、「チューニング」、すなわち、楽器を「調律」するように大学間で教科や課程の「到達目標」「学習内容の詳細」「養成される能力」「必要な人的・物的資源」「課程修了後の成果」を確認し合い参照基準として共有することにより、国際的共通理解に基づいたコース設計と単位・学位認定の基盤を形成するプロセスが必要となります。同時に、単位を個々の大学で「閉じる」のではなく、組織や国を越えて加算・累積する単位制度を設計し、転学・編入・復学を容易にしなくてはなりません。これによりカリキュラムの等価性と互換性が確保され、ダブルディグリーや共同学位などの連携学位が安定的に拡大し、また、社会人の「学び直し」も充実かつ有意義となります。

一橋大学では、社会科学分野の高度な学術交流を促進し、国際的に適用性の高い学位を授与することを目的として、アジアそして世界有数のパートナー大学及び世界に広がるチューニングネットワーク組織と連携して、チューニングを研究、実践、普及します。



TOPICS & NEWS

一橋大学	
国際化推進本部	2013年10月 NEW! マンチェスター大学 北川文美先生が、イギリスにおける近年の高等教育改革について、10月31日(木)に講演を行いました。
EU Studies Institute	2013年10月 NEW! 広島大学と共催でロバート・ワーヘナル教授による公開研究会を10月19日(土)で開催しました。 「大学の教育の同調事業(Tuning):日本の高等教育への示唆と課題」
大学教育研究開発センター	2013年10月 NEW! 第2回チューニング国際シンポジウム「チューニングによるグローバル産学連携」を10月17日(木)に開催しました。
国際教育センター	2013年10月 NEW! ロバート・ワーヘナル教授による講演会を10月16日(水)に開催しました。
学内教育関連サイト	2013年10月 NEW! 「ヨーロッパ・アジア太平洋の社会科学ネットワーク国際シンポジウム」を10月29日(火)に開催しました。
教育の高度化と国際事業	

チューニング・リソース・センター
TUNING Educational Structure in Europe
TUNING USA
TUNING Latin America
TUNING Russia
TUNING Africa

2011年～2014年
科学研究費助成事業【B】
「高等教育改革、人材流動、ブレインゲインの相互作用に関する実証研究」

➤ モビリティとチューニングの基礎研究（欧州、北米、中国）

2012年～2013年
大学戦略推進事業
「チューニングの研究、実践、普及：学位・単位の国際的通用性確保のためのカリキュラム基盤整備」

➤ チューニング実践の研究と基盤構築、実践支援の設計
事例：

- シラバスの活用
- 学生ポータルを活用した留学情報の充実化
- IR, GPA, チューニングの連動化

日本でのチューニング実践： 一橋大学の事例から

2014年4月～

- 文部科学省特別経費(機能強化プロジェクト)の支援を受け、「**チューニングの研究、実践、普及**」を開始。
- 日本及びアジアの高等教育の国際的通用性を高め、学生・研究者・高度人材の国際的なモビリティ(流動化)を促進することを目的に、一橋大学創設者にして初代文部大臣の森有礼の名前を冠した「**森有礼高等教育国際流動化センター**」を発足。



In order to ensure the academic significance of increasing opportunities for studying abroad and academic exchange, it is essential to create platforms that help to re-design internationally available study courses, transferable and compatible credit and degree systems. This process is available through Tuning.

In the Tuning, universities across institutional and national boundaries define outcomes and competences that students are expected to achieve when a degree has been earned. Applying them as reference points Tuning also asks universities to fine tune their human and material resources. Therefore, tuning widens opportunities not only for current students who want to study abroad or at another university within a country. Besides, it increases a choice for those people who work but want to re-charge their general education and/or professional knowledge. Thus the result of Tuning is expected to be echoed in mobility motivation as well in stably expanded double and joint degrees.

Like the tuning of instruments before a performance, TUNING JAPAN is responsive network in promoting a high-quality student and academic mobility in the both social and natural science fields and internationally compatible degrees awarded. With the co-operation of Asian and the world's leading partner universities, and through building of wider partnerships with globally expanding Tuning networks, TUNING JAPAN carries out research, implementation, and promotion of the Tuning process.

TOPICS & NEWS

- Mar. 2015 Seminar "Modernizing degree programs in global context" was held on March 19-20, 2015.
- Mar. 2015 Prof. György Nováky made a presentation "Quality Assurance, Education and Tuning in an Internationalizing world of higher education" at Osaka University on March 6, 2015.
- Aug. 2014 Article by Kazuyasu Ochiai, Professor and Executive Vice President in Education and Student Affairs in Hitotsubashi University "From horizontal to vertical ? Hitotsubashi University aims for a new higher education in the global age" has been published in KEIDANREN monthly publication (August 2014)
- July 2014 Interview with Kazuyasu Ochiai, Professor and Executive Vice President in Education and Student Affairs in Hitotsubashi University "Using 'Tuning' To Boost International Mobility for Students and International Validity for Education Programs" has been published in Hitotsubashi Quarterly (July 2014 Vol.43) .

Tuning in the World



チューニングをセンター基幹事業として据え、調査研究を強化しつつ、**基盤構築、実践へと移行**

- チューニング先進事例調査・研究結果、及びチューニングの実践ノウハウをウェブ配信
- 欧州からチューニングエキスパートを専任教員として採用し、講習会、研修会等の開催
- IRの強化と、教学データの国際比較調査・分析の枠組み開発・設計
- コンピテンス調査の設計と実施
- チューニングアカデミーの開催



日本でのチューニング実践： 一橋大学の事例から

事例1 ウェブシラバスの改修 情報提供の充実化と、教育と学習に関する実態の把握

改修目的：

- 学生の積極的履修選択と自律的学習を促す
- 学生の視点から授業の内容(学生の学習内容)と期待される学習成果を教員が確認する

- ①科目とカリキュラムを理解し、
- ②十分に説明できるようにする

➤ 授業の積み重ねが課程を形成する。

⇒各授業の成果の積み重ねが課程を通じた成果の主要な部分を占める。

日本でのチューニング実践： ウェブシラバスの例

ウェブシラバス(1ページ目) コンピテンスベースのアプローチ

科目名	ドイツ語文学・文化研究	学期	夏
科目区分	XXXX 科目	曜日・時限	月3
教員名	XXXX	単位	2
開講年度	XXXX年度		
学部・学生の指定	XXXXX		
質問等の連絡先・オフィスアワー	質問の連絡先は、××××@××××まで。 オフィスアワーは○曜日○限です。		
授言語	およびドイツ語		

【授業概要】は「履修ブック」に転載されます

【授業概要】

1. 授業概要

最終更新日：2013-〇〇-××

【授業の目的】

本講義は、ドイツ語圏の児童文学作品の読解を通して、

- ・ 歴史・社会・文化的背景の考察
- ・ 読解のための理論的枠組の理解
- ・ 児童文学研究としての読解例の蓄積・ドイツ語独特の表現を目的とする。

教員が学生に何を期待しているのかがわかるよう、授業の「ねらい」を記入してください。

【授業の到達目標】

- ・ ドイツ語圏の児童文学史の特徴を理解できるようになること
- ・ 作品に表されている自然観、教育観、家族観、人間や社会観
- ・ ドイツ語の読解能力の向上
- ・ ドイツ語独特の表現に対する理解や感性を高め、言語表現を豊かにすること
- ・ 児童文学（ひいては「文学」全体）を学問的に追究するための基本的知識・
- ・ 複数の作品を分析・統合し、自らの考察をもとに言語化し発表することがで

本授業を通じて学生が習得・理解し、活用できるよう期待される知識・技能・能力等の学習成果を記入してください。その際に、①本授業特定の**専門的知識**・技能・能力、並びに②**分析力**、企画力、自律的学習力など**一般的能力**の両面における成果をご検討ください 注1。

【授業の方法】

毎回、受講者数名に作品の要旨・考察・疑問点について発表してもらう。その後解説および全体でのディスカッションを行い、作品への理解を深める。
受講者は自身の発表経験や他者の発表を通じて、作品を理解し、考察を共有し、ドイツ語及びドイツ文化に関する文献の読解能力を養う。

講義、演習、実習・実験、グループ学習、インターンシップなど授業の形態を記入してください。電子機器など特に使用する機器などもあわせて記入してください。注2



日本でのチューニング実践： ウェブシラバスの例

注1 一般的能力の例として、分析・統合する能力、問題解決力、意思決定力、リーダーシップの能力、自主的に学習する能力、組織力、調整力、計画力、企画力、協力し合う力、コミュニケーション能力などが挙げられます。

注2 その他、ワークショップ、自主学習、プレゼンテーション、フィールドワーク、チュートリアル、プロジェクト学習、指導つき個人研究、オンライン・遠隔指導など、任意に記入してください。

他の記入項目：

1. 授業概要その他

【他の授業との関連】

【教育課程の中での位置づけ】

2. 授業の内容と計画

【授業の内容】

【計画(回数、テーマ等)】

【テキスト・文献】

【授業時間外の学習(求められる予習・復習の内容)】

3. 評価

【成績評価の方法】

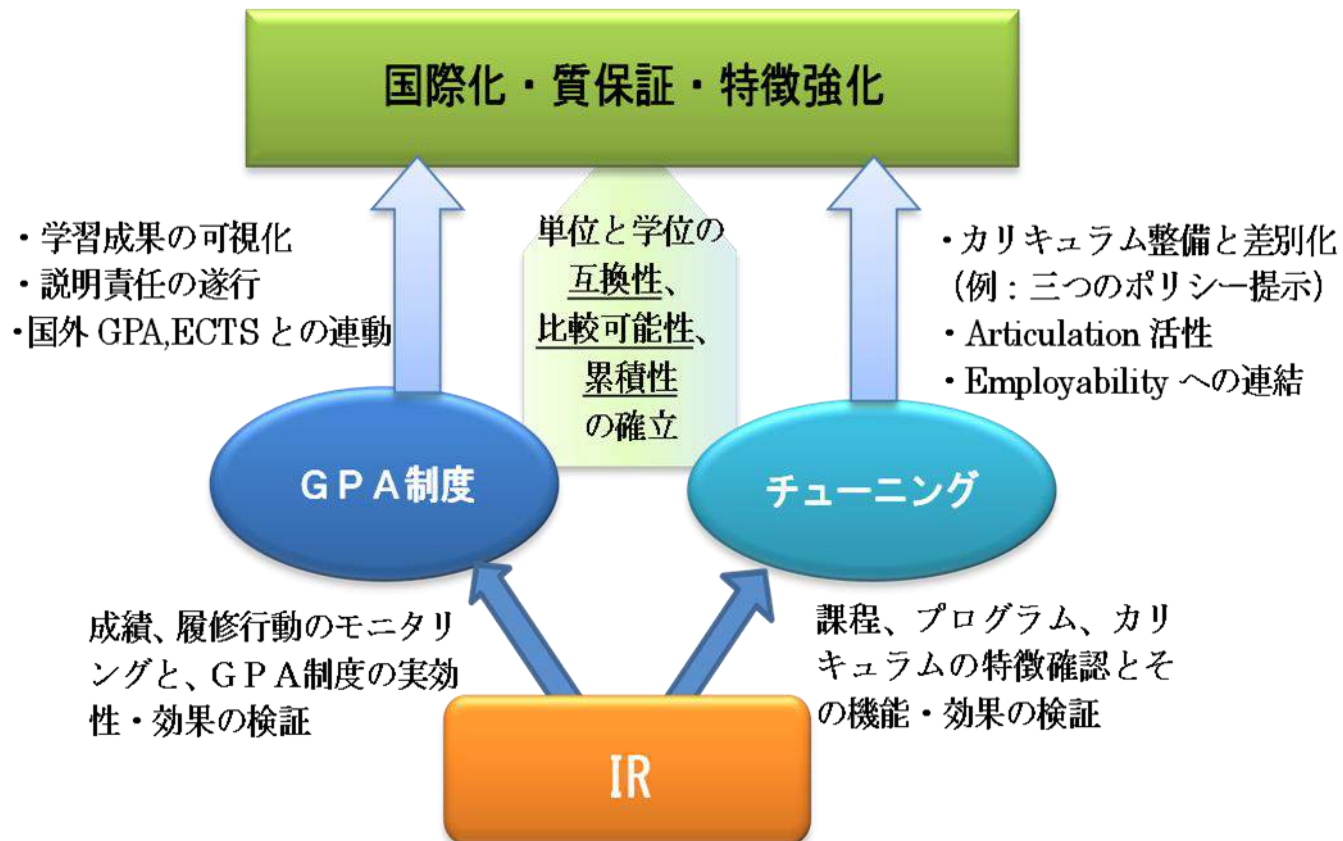
【成績評価基準】

4. その他

【受講生に対するメッセージ、他】

日本でのチューニング実践： 一橋大学の事例から

事例2： 既存の教学改善取組との連動性





日本でのチューニング実践： 一橋大学の事例から

事例2： IRを用いた包括的分析と発展的応用

【科目をケース単位として】

- 履修データの科目(授業)別加工と、これへの、* ウェブシラバスデータ、* 授業アンケート、* 留学データ等の統合分析により可能となる、
 - 既存科目とカリキュラムの特徴認識とその強化
 - 不足科目、プログラム、カリキュラムの認識とその対応

【学生をケース単位として】

- 履修・成績データの学生別加工と、これへの、* 進路データ、* 卒業生(企業)を対象としたアンケート等との統合分析により可能となる、
 - 履修パスウェイから進路への連続性の確認
 - 学習内容とその成果の、企業や社会のニーズとの照合
- 分野別参照別基準作成へのフィードイン、既存基準の検証、裏付け、修正
- 学位プロフィールの作成

★科目のオープンエンドな組み立てと、目的(成果)主導型の最適な組合せを

eg. 現行の授業とその連続はどのようなプロフィールで、それは社会の要請、教員の意図、学生の期待とどのくらい対応しているのか。



日本でのチューニング実践： コンピテンス質問紙調査

複数の大学が、学生、教員、卒業生、企業その他の雇用主（以下雇用主）を対象にした調査を行い、大学で習得することが期待される知識や技能を明らかにし、それらを共有することにより、大学教育を強化すると同時に、大学間で知識や人材の流動性を高める。

具体的には、

- 大学教育の主要分野で習得される**コンピテンスの具体的な定義**を作成する。
- 分野ごとのコンピテンスについて、学生、教員、卒業生、雇用主の**認識の同一性と相違点を確認**し、学問的なレベルから社会のニーズに至るまでの、様々な視点で考察を行う。
- 大学教育の**説明責任を強化**し、社会や経済のニーズを汲み取った教育課程の編成、カリキュラム改善、教育内容の向上につなげる。
- 個々の大学がそれぞれの**強みと特色を確認**し、その強化を図る。
- 海外のチューニングネットワーク事業と共通の枠組みで調査・分析を行い、他地域の調査結果と比較検討することにより、対象分野の**国際的比較可能性を高める**。
- 上記工程の積み重ねにより、教科の相互認証性の確保から**学位の相互認証性の向上**へと進展させ、共同学位や連携学位の**学術的信頼性を高める**。²⁶

まとめにかえて： チューニングの貢献と課題

【貢献】

- コンピテンス定義を大学とそのステイクホルダーで議論すること自体に意義がある
- 社会や学生に対する説明責任を世界的観点から遂行しうる
- 成績評価や単位・学位の授与に実質性、透明性、信頼性を持たせうる
- 「学生本位」であることは、流動化の進行に伴い、むしろ不可欠
- 理論的には、機能分化型の「共存」を可能とする

【課題】

- アウトカムアセスメントと演繹的なアプローチが内包する問題への対応
- 「ニーズベース」の大学教育が川上と川下に及ぼす影響に深慮要
- 「到達目標」か「ミニマムスタンダード」か
- 参照基準の汎用性、共有度、応用性への配慮
- 「相対的価値」と「絶対的価値」、「共存」と「階層化」の曖昧性



ご清聴ありがとうございました。

さらにご関心のある方は、以下のサイトをご参照ください。

EUチューニングサイト: <http://www.tuningeu.org>

EUチューニングアカデミー: <http://tuningacademy.org/>

日本チューニングサイト: <http://www.tuningjapan.org>